

名も無き花

図書館長 中村 吉 秀

主婦の仕事のなかに、「名前のない家事」というのが夥しく存在する、ということが、近年話題になるようになった。名前は付いていないけれど、誰か気づいた者がやらないと、家の中が回っていかない。夫の方が気づけば夫がやればいいことだが、気づくのは、あるいは、気づいてすぐ行動に移すのは圧倒的に妻の方が多い。結果的に妻の負担が重くなっていくのだが、名前がないために、その負担に気づいてもらえない、というものである。ウェブ上には「名前のない家事」の百項目くらいに及ぶリストがある。

例えば、「飲み食いした後の皿やグラスを流し台に運ぶ」といった細かいことである。「配膳」でも「洗い物」でもないで名前は無いが、けっこう手間はかかる。「脱ぎっぱなしで放置されている服を畳んでタンスに片づける」のも、男性はなかなか気が回らなそうである。「シーツの皺を伸ばして寝具を整える」ことなども無意識にやっているようで、そこそこの労力が要ることである。

家事だけでなく、どんな仕事にも「名前のない作業」は付きものである。わたしは、高専の印刷室に行くと、散らばっているコピー用紙をサイズ別に揃えて積み、使いきられているサイズの紙は、箱を開けて新たな包みを出しておく。空いた箱はつぶしてごみ箱の脇に立てておく。別段奉仕しようなどという大それた思いでやっているのではない。次に自分が印刷しに来たとき、すぐにかかれるようにしているだけだ。この『青樹』の編集作業を統括するのも、図書館長であるわたしの仕事だが、そのなかにも、「巻頭言のネタを考えて執筆する」という、手間の小さくない仕事がつきまとう。

これらは、名前が付いていないがゆえに、価値が過小評価されるし、話題にのぼることも少ない。名前を与えることは、物事に重みを与えることでもあるのだ。

数年前、既に社会人となっている卒業生がツイッターに、「君はなんでもできるね、と感心されつついろんな雑用を振ってこられて、本来の自分の仕事が遅れに遅れてしまう。この現象に名前はありますか？」と書いていたので、わたしは少し考えて「器用貧乏」と返信した。その語義を辞書で調べた彼は「まさに！」と感動のツイートを入れた。彼はその後、自分の性格や仕事のし方をじっくりと自己分析し、結局転職した。その「名前」を手がかりに、自分のあり方を対象化できた、と彼は後で語ってくれた。名前が与えられたことだけが理由ではもちろんないだろうが、人生を切り拓くきっかけともなり得るのだ。

人の名前にもそういうところがある。「せんせい」という曲（作詞・阿久悠）では、主人公の女子中学生は、初恋の相手である先生を「せんせい」という「名」で呼ぶ。名前ではないのだ。人格でなく偶像でしかない。名前を呼んで慕うところまで愛が深まっていけないから、初恋ははかなく散る。

文章の筆者として表示する場合も、匿名やハンドルネームよりも、実名を掲げる方が、その文章の信憑性を高めることになる。現代は、ウェブ上に誰でも手軽に文章を発表できる時代である。しかし、活字になる文章の重みというのは、今も厳然と存在する。文章が活字になるまでには、文章の質のふり分け、校閲などいくつもの段階を経ており、その価値があると多くの人に判断されて初めて活字になるからである。

この『青樹』は、学生が最も身近に文章を活字にできる機会として設けられている。匿名やハンドルで書かれることの多い、いわば「名も無き花」である学生の文章に、「名前を与える」のが、この『青樹』の役割ということである。

せっかく国語教員に選定されたりクラスでの選考会に残ったりして編集部会に上がってきたても、残念ながら掲載できなかった作品も多い。それらは、名前のある花として咲くには何か足らなかったのだ、と理解してほしい。